

# DRAMA かながわ 56

神奈川県演劇連盟事務局：横浜市中区福富町西通り52（横浜演劇研究所内）Tel. 045-261-4866



## 芝居塾を終えて

### 風雲かぼらちゃの馬車

今回芝居塾を担当させていただくに当たって、高校生には一つの舞台を創り上げるには多くの人たちが関わっているということや、演劇を通して自分自身と向き合ってみるということ伝えていたと考えていました。

はじめは、高校生と打ち解けて一つの舞台を創り上げていけるのか、高校生が私たちについてきてくれるのかということに不安に思っていました。しかし私たち全員が一つのものを目指し、それに向かって日々努力をして全員が一つになれるような舞台を創り上げなければ、芝居塾の舞台は成立しないのではないかと考えていました。また、私たちが高校生たちと一つのものを創り上げることによって初めて、高校生たちに何かを与えられるのではないかと考えていました。しかし、結局最後には私たちも高校生に大き

なものを与えてもらいました。

稽古を始めたばかりの時には、私たちも高校生も慣れない環境の中、お互いを知らうと必死だったように思います。高校生にとってはきっと初めてのことが多かったのではないかと思います。しかしそんな中、手探りでも必死に前を見て、必死に私たちと一緒に舞台を創ろうとしている高校生の姿はととてもきれいでした。そうして稽古を続けていくうちに徐々に高校生は打ち解けてくれて稽古にも慣れてきました。しかし、そこからが始まりのように感じました。その時こそが、やっとみんなが同じ方向を見ているという出発地点に立てた瞬間だと思います。

今回、「夏の夜の夢～Arabian Night's Dream～」と題してシェイクスピアの夏の夜の夢を風雲かぼらちゃの馬車らし



さを出しながら、アラビアン風に行わせていただきました。シェイクスピアという名前を知らない方は少ないと思います、その中でも有名な「夏の夜の夢」を行うことで高校生にいろいろなことを学んで、感じてほしいと考えていました。有名なこの作品を行うことはプレッシャーでもありましたが、終わってみればこの戯曲で高校生と一体となって作品を創れたことを嬉しく思います。

高校生と稽古をしていると、彼らから学ぶことは多々ありました。今まで年に何度か公演を繰り返してきていろいろなことを当たり前と思うようになってしまっていたのですが、それらが当たり前ではないということに気付かされました。演劇を始めたばかりの頃感じていた想い、今では忘れかけていた想いを彼らは思い出させてくれました。一つの舞台をみんなで創り上げていく中には、たくさんの人たちが努力をして一生懸命に素晴らしいものを創ろうとしているということ、誰か一人でも欠けてしまっただけで成り立たなくなってしまうということに改めて気付きました。高校生にとってはそれが当たり前ではなく、全員がこのメンバーで一つの芝居を創り上げていくという喜びを感じているのだと、とてもよく伝わってきました。そのようなことを感じながら稽古に参加している高校生は本当に輝いて見えました。彼らの姿を見ていて、彼らと接していて、今私たちがこうして演劇をしていられることも、お客様に一つの作品を観ていただけるということも、決して当たり前などではなく素晴らしいことなのだ改めて感じました。芝居塾を通して、高校生にそういったことを感じてもらうはずが、私たちのほうが高校生に教えられたように思います。

私たちから見ると、高校生はいつも生き生きと輝いていました。何をすることも常に一生懸命でした。今、この瞬間を必死に頑張っているのだと感じました。若いというエネルギーはとても素晴らしかったです。悩みはするけれども決して後ろ向きではなく、常に前向きに進んでいました。こうして突き進んでいくことに迷いのない高校生たちの姿は、私にとっては羨ましくもありました。迷いが無いという純粋な姿はとてもきれいで、私たち劇団員に大きな影響を与えてくれました。彼らをみていて、常に前向きに迷わず真っ直ぐに進んでいく素直さを持ちたいと思いました。今回の芝居塾を通して、作品を創り上げていくということでもそうですが、一人の人として彼らとの出会いは私にとって素晴らしい出会いになったと思っています。そして何より、彼らがこの芝居塾を心から楽しんでいて嬉しく思います。彼らと日々を過ごして一つの作品を創ったこの4カ月間の期間は、私にとっては青春のように感じました。芝居塾をやらせていただいて、最初は不安でいっぱいでしたが今となってはすごくいい経験をさせていただいたと思っています。これからは、芝居塾で彼らから学んだことを胸に秘めて頑張っていきたいと思っています。

高校生の若い力やエネルギーは私たちにはもうないものなのかもしれませんが、彼らのような真っ直ぐな気持ちや純粋に突き進んでいこうとする気持ちは忘れてはいけないことだと思いました。今まで演劇をしてきて、徐々に忘れてしまったことはたくさんありました。それに気付かせてくれた芝居塾という環境や高校生に感謝の気持ちでいっぱいです。これからは常に初心を忘れずに、芝居塾で学んだことや感じたことを生かしていきたいと思っています。



## 風雲かぼちゃの馬車

「夏の夜の夢 ~Arabian Night's Dream~」 脚色/南瓜良成 演出/土井宏晃

2009年8月29~30日

於：神奈川県立青少年センター2F多目的プラザ

「次の芝居塾は"かぼちゃの馬車"がやるんだって！」その話を聞いた時直感した、コレは絶対楽しい芝居になると！

とはいうものの、正直見くびっていたのは事実である。高校生がシェイクスピアを演じるのだからきっと初々しい、緊張した芝居をするのだろうと。

幕開きかぼちゃの馬車ならではの役者による前説が始まると緊張した面持ちで舞台入りし初々しさが残っている。しかし「夏の夜の夢」が始まるとそれは一転し高校生とは思えぬような表情、声で演じていく。かぼちゃの馬車といえば「歌って、踊って、人を斬る」のキャッチコピーで知られるように、さながらロックミュージックのコンサートのような躍動感、一体感、疾走感が持ち味で、今回の芝居でもそれは発揮された。

躍動感ある演舞、笑を交えた歌、そして息の詰まるような殺陣、劇団員はもろろんのコト、塾生達も高校生であることを忘れさせ

るような見事な動きに圧倒された。大変な稽古をしてきたんだらうと素直に感じられ、コレだけの動きを考え一体化させることが出来た、主宰土井の演出力、求心力を考えるとすばらしいものがある。

これまで何度か「かぼちゃの馬車」の芝居を見てきたが今までの中で一番の芝居だったと思う。本筋はきちんと演じ、魅せるが、随所に役者の自由な発想を織り交ぜていく。コレだけのものを創るには稽古が色々大変だったと思うが、きっと楽しい稽古場だったらうな、演者が集まりたくなるような場所だったんだらうな、そんなことを思うと、ちょっと嫉妬する。(笑)

いちファンとして、これからも役者と観客が一体となって楽しめる芝居を創って欲しいと願う。

【劇団蒼生樹 海老名信吾】



## G/9-Project Act 13 &amp; 第7回神奈川県演劇連盟合同公演

## 「朱雀の翼」

《途中経過／9月24日現在》

まずは皆様にお詫びをしなくてはなりません。昨年今回の企画を演劇連盟から承認いただいた後、青少年センターから12月17日から20日という確定の日程をいただきました。その頂いた日程をどこでどう間違えたのか一週間前の10日から13日だと勘違いをし演劇祭のチラシや出演者募集のチラシに掲載してしまいました。チラシに訂正のシールを貼っていただいた皆様、一週間前の日程で出演を考えていただいた方々、その他大勢の方々にご迷惑をおかけしたことを、紙面の一角をお借りして誠に申し訳ありませんが、心よりお詫びいたします。

これより本題に移ります。神奈川県立青少年センターホールでの公演。G/9-Projectとしては初の大舞台である。今までは相鉄本多劇場やSTスポット、シルクロード舞踏館などの小劇場を借りて公演をやっていただけにスケールの大きさが違う。しかも合同公演という絶好の機会を与えていただいた。そこで普段の公演では試したことのない大人数が出演する作品を作る事にした。県連加盟劇団の協力を強く要請するのと平行して演劇未経験の一般出演者も募集する。インターネット上の掲示板の他に、街中にあるふれあい伝言板等に『村人A募集！』という名称で貼り紙を貼って回った。そして8月、公演専用ページを当劇団のサイトにつくり、進捗状況報告のために稽古場日記で積極的に情報を流していった。また8月の中旬には劇団員だけでキャンプ合宿を行い作品の世界観である文明が減んだ後の質素な生活を実際に体験した。

今回の作品の舞台になる世界では、人類は絶滅の危機に陥り、原始的な生活をしていた頃の文化まで戻ってしまっている。そのためこのキャンプでは手始めにテレビやラジオ、時計や携帯電話などの使用を禁止し、陽が昇って目を覚まし、腹を減らして飯を作り、陽が沈んで眠りに入るといった時間にとらわれない生活を送った。また山に登ったり、川に入ったりして自然と触れ合い、劇中の登場人物達と同じ生活を体験した。このキャンプでの一番の発見は人の声である。昨今のアウトドアブームのためキャンプ場にはたくさんの方が訪れていた。お年寄りから小さい子供までが山中の一角で協力して火をおこして飯を炊き片づけをする。それはまるで一つの集落を形成しているようだった。そのおかげで劇中ででてくる集落の様子や人々の生活がありありと想像でき、その中で人の声は当たり前のように存在しているものだと気づくことができた。すぐ側を子供が笑い

ながら元気に走り回りみんなが大きな声で共同作業をしている。普段であればうるさく感じるかもしれないこの声は、都会では味わえない元気と活気を与えてくれた。2泊3日のキャンプだったが非常に有意義なものであった。

次に出演者についてだが、募集の予定が当初の予定より大幅に遅れ8月からの募集になってしまったため9月末まで募集をすることにした。また9月11日には参加者向けの説明会も行い、本作品についての世界観やキャスト募集の要項などを説明した。説明会では話の粗筋や稽古日程、また劇中の登場人物の関係性などを紹介したり実際に劇中で使う衣装も披露し、来ていただいた皆様にイメージを伝えていった。そして10月上旬には、作品のプロモーションビデオを当劇団のサイトで公開する予定である。説明会の時より、より分かりやすく作品の世界観や雰囲気をお見せするのでぜひご覧いただきたい。

次に稽古場についてである。今回の作品は大勢の参加を予定しているため、民間の倉庫を借りて稽古をする予定だが今現在見つかっておらず苦戦している。継続して探していく予定だが、別案として横浜にある地区センターやコミュニティハウスなどなるべく地の利がよい所を転々としていくことも視野にしている。

稽古は9月14日から開始した。最初は顔合わせの意味でゲーム要素を取り入れたワークショップで徐々に参加者に慣れていってもらおう。この初日は和気あいあいとした非常にいいムードでおわることができた。10月からは稽古日を増やし台本の配布、キャストの発表と本格的に練習を始める。そして11月から本番までは毎日稽古を開催して舞台をつくっていく予定だ。

また衣装も人数分そろえないといけない。今回は未来の世界が舞台となるため安い問屋で生地を購入し、デザインから製作まで全て自分達でやらなければならない。もちろん大道具も外注するのではなく自分達で作る。しかし、今回劇中で使用する楽曲はプロの方をお願いしてオリジナルを作ってもらえることになった。お願いするのが遅れてしまったため出来上がりは本番直前になってしまうが、どんな曲が出来上がってくるかいまから楽しみである。

さて、公演までは残りあとわずか。工程表は本番までギリギリ詰まっている。この努力がよい作品につながり、大勢の方々に見てもらえるようより一層頑張ってくださいと思う。

(G/9-Project 斉田翔理)



# かわさき演劇まつり、昔、今

## 1. かわさき演劇まつりの誕生

今から40年ほど前の川崎は「公害の街」というイメージで定着していた。事実、夜も昼も休むことのないコンビナートから赤や黒の煤煙が降り注ぎ、晴れた日中でも空は淀んだ煙に覆われ、洗濯物が真っ黒になってしまうといった有様だったのである。喘息で苦しむ所謂公害病患者が増え続け「白い雲、青い空」の川崎であって欲しいという市民の願いは切実だったのである。その願いは1970年伊藤革新市政誕生へと結実した。その結果大企業優先の姿勢から市民生活優先の市政へと大きな転換が図られたのである。文化演劇の分野にもささやかであったが反映された。

市は川崎演劇協会に対して「市民を無料招待して演劇発表の場を設ける事、そのための助成金として50万を計上する」というものであった。第一回は1972年、参加集団は京浜協同劇団、劇団「ぶるくわ」、ゼオンの職場演劇サークルなどであり会場も親子づれで満席となり盛況の幕開きとなった。

## 2. 無料招待の壁をどう打ち破るか

40年近い昔とはいえ、いくら会場を無料で提供してくれるからといって50万で満足いく舞台が創れるものではない。それと「無料招待」でくるお客と舞台が、「芝居を創りそれを観る」という程よい緊張関係を生じにくくさせているという状況も生まれていたのである。市との協力の下「市政だより」と全市小学校への宣伝チラシの配布など、予約段階でいっぱいになってしまう会場には紙飛行機が飛び交うなど、現場は混乱していたのである。

無料招待をやめて一定の入場料を頂くこと、助成金を増額することの二点で市との折衝を粘り強く重ねた結果、前者は助成金という名目で観客が応じてくれるなら徴収してもかまわない。後者は毎年増額という結論をひきだしている。

「演劇まつり」草創期、実質的に川崎演劇協会を構成していたのは京浜と劇団「ぶるくわ」だけといっていい状態で、川崎演劇塾が加盟するのはそれから約10年後である。当時のレパをあげてみると、第1回は「夕鶴」「三年寝太郎」第2回「彦一ばなし」第3回「アリババと40人の盗賊」第4回「おんによる盛衰記」である。劇団にとっては本公演二回以外にそれ以上の創造的な労力を要求される「演劇まつり」は過重な負担となっていくのだが、子どもたちの歓劇後の喜ぶ笑顔に後押しされて続けられてきたと言っていいだろう。赤字を覚悟でやった公演もあり、事実第5回「はだか王さま」では専門演出家を迎えたこともあって大幅な赤字公演となっている。第6回は「しばてん太郎」第7回「星の牧場」第8回「春をよぶ太鼓」(宮沢賢治作しし踊りのはじまりより佐藤譲二構成)となっている。

## 3. 混迷期に突入

助成金は微増しているとはいえ満足いくものではなく、何より劇団員にかかる年間三回の公演は重荷になっていったのである。多摩芸術学園演劇科に依頼したりという変則的な「まつり」に成らざるを得ない時もあった。そこでは「親と子で共に楽しむ舞台」というコンセプトは崩れはじめ、その時、その条件下での企画となり一貫性に欠けていくこととなる。劇団ではこの間「演劇まつり」と称して「川崎・夜光町」「亡命者」など大人向けの作品を稽古場で上演している。

その混迷期は80年代の終わりごろまで続くことになり。これを抜け出せたについてはいくつかの要因が挙げられよう。助成金が130万円まで引き上げられたこと、川崎演劇塾が加わってきたこと、入場料としてすべての観客から均一に負担してもらったこと、京浜が「原則年間二回の公演とする」活動の変更に踏み切った事などが挙げられると思う。

## 4. 息を吹き返すのだが

「親と子で共に楽しむ舞台」を目指した「演劇まつり」は再起動することとなる。1990年第19回「オバケちゃん」第20回「龍の子太郎」第21回「アリババと四十人の盗賊」(再演)第22回「オズの魔法使い」第23回「おらほにゃこんなカップがおった」第24回「ふたりぶんのほく」第25回「モモ」と続けられた。

ところが再び不安材料が広がることになり、陰りがみえはじめたのである。

ひとつは市の財政の経費削減の号令の下、助成金の一割カットが毎年押しつけられてきているのである。(2009年度は75万円)それから子どもたちの観劇要求が極めて低下して来ていることである。かつては2000名ちかくにも及んでいた学校関係からの観劇申し込みもあって川崎2会場での公演が可能であったのだが、ここ数回の実績によれば数百台にまで落ち込み公演会場は一箇所のみで推移している。

今年度第34回「モモ」の再演は、応募出演者や主催川崎演劇協会の必至の制作上の努力もあって1740名の観客を迎えることができたが、今後を考えるとなかなか予断を許さない事態となっているのである。

「行政との協力でこのような長きにわたって取り組まれている「演劇まつり」は全国的に見てもあまりなく、誇りに思ってもいい」といってみてもその実情は関係者の犠牲的労力の上に成り立っているものであり、無理を重ねればこの先どうなるかは自明のことではある。困っているところにこそ行政の光はあたるべきであり、文化の分野こそなおざりにされてはいけなさと考えるのは「県演連」との共通の課題であろう。

かわさき演劇まつりは新たな転機に立たされているといえよう。  
(京浜協同劇団 藤井康雄)



# 地域から愛され続け 親子で作る劇団ぽかぽか「ピノキオ」



## ◆今回の公演も1500名の観客に囲まれて

横浜の栄区を中心にして、年に一度だけの公演を続けて来年は15周年を迎える親子で作る劇団だ。その存在と役割が地域で期待され、Y150では子どもたちのミュージカルを行政と一緒に展開するなど意欲的。特筆は劇団として一公演で1500名の入場者があるのは素晴らしい。

## ◆地域の人たちと舞台作り。当日の受付や裏方は賑やかだ

劇団の特徴は地域の人たちと一緒に舞台を作り出す作業を実行してきたことだろう。それが制作の面で力を発揮する。芝居作りだけでなく常に地域の人たちとの連携があるからこそ、当日の会場整理や受付で協力する姿はさわやかだ。ピノキオでは初めての試みだが小さな手話通訳も始まった。

## ◆舞台の裏方も年々充実。親父さんたちの活躍が光る

子どもと母親が役者として稽古場に出向いてしまうと親父たちはちょっとそわそわ。仕事帰りに子どもを迎えに寄ったりして、やがて裏方のスタッフとして道具作りに参加する。普段は芝居などに手を染めたことのない父親が、黒衣で舞台転換をするのだから面白い。親父仲間や家族の結束がこんな風に生まれている。

## ◆観客も舞台作りに参加して、ハラハラドキドキ

観客の巻き込みにエネルギーをつぎ込むのも劇団の特徴だ。舞台は趣向を凝らし、観客も核心に入りこみ一緒に作り出す。ピノキオでは一抱えもある丸太が四方から出現したり、許せるところならどこでも舞台とする。圧巻は海の場面。舞台上でうごめいていた波布が一気に会場に流れ込み幅11間の観客席を埋め尽くし、やがてその大波布は筏に乗ったピノキオたちを巻き込んでいく。これだけのことをやってのけるには信頼できる裏方のチームワークがあるからだ。

## ◆舞台衣装や舞台装置のこだわり

ピノキオは舞台衣装の数だけでも40着。特殊な衣装が多いがプランナーは自分の描いた絵が舞台上で生き生きと跳ねまわる夢を描き製作をする。ここにも直接舞台にかかわらない協力者チームの力が発揮される。舞台装置は狭い空間をフルに使うための思案が目立つ。吊りものや、回り舞台のように移動する壁など。やがて演出の要求を上回るプランが実践されてお客をお話の中に取り込んでいくから面白い。ここでも低価格な予算だ。早い話シダンボールでも重量感のある筏や船を造る。道具は先に紹介した親父さんたちとその友人たちの力作である。

## ◆戯曲も歌も音楽はすべてオリジナル

毎回すべてがオリジナル。ぽかぽかの代表者がその創作を一手に引き受けている。作曲しアレンジをすることは大変な能力と力量を発揮しなければならない。歌唱指導や振付、そして照明と専門家が家族のように協力し力を貸してくれるから格段の強みが生まれる。この協力者をひきつけているのも劇団員の魅力で人脈の広さを物語る。これは劇団の宝ものだ。

## ◆稽古は50回を超え、数回はホールも使う

稽古回数は50回を超える。週二回の夜と休日の一。乳飲み子や幼稚園組もいて稽古場は賑やか。子どもたちの成長は大人には大いに刺激となる。格安の入場料は前売500円で日時指定。宣伝用のチラシ、チケットはすべて楽しい手作り。演出は稽古場の雰囲気作りから俳優たちが身体を動かし声を出すところにも注意を向け、大勢の観客に囲まれて舞台の幕を開ける大切さを説きながら付き合うことになる。



(劇団ぽかぽかの  
演出を続けて。団のぼる)



# 劇団やぶさか

初めまして。

恐れ多くも、この度、神奈川県演劇連盟に加盟させて頂きました“劇団やぶさか”です。  
私達は、お嬢様大学として有名な(?)フェリス女学院大学の演劇部を母体としております。  
「夢を壊すな」と思っても(…)その辺はどうぞ曖昧にしておいてください。

## ♠ 劇団やぶさかって？

結成より9年、“乙女心にグッと来る”を密かなテーマに脚本／演出の海老原あいを中心に、ほぼ女性ばかりの団員達が、エンターテインメント性の高い作品創りを目指し、毎公演、華やかな舞台を繰り広げています。

常に“参加者全員でのモノ創り”を意識しながら、現場でも積極的に意見を出しあっています。「楽しく真面目に」を合い言葉に、半年に一度のペースで公演活動を行っています。

## ♥ 特徴Ⅰーハマのツカ!?

当劇団は女優ばかりの舞台ゆえ、男役も“当然のように”女優が演じています。横浜の宝塚…とまで大口は叩きませんが、舞台では「途中から女優が演じてるって事を完全に忘れました」と評される程のナチュラルな男役ぶりは、まさに女性劇団ならではの!

また、当劇団は各種美術にも、大変力を入れております。公演毎にモチーフを決め、手作りで製作される女性劇団らしい一期一会の美術要素にも密かにご注目下さい。

## ◆ 特徴Ⅱー時々、音楽劇♪

私達の母校には音楽学部があり、団員にも声楽科出身者が居ます!その伝手をたどって始めた【生演奏と物語のコラボレーション=贅沢な音楽劇】を、今でも時折上演します。

基本的には、音楽は演奏家の方が、芝居は役者が担当…とシッカリ棲み分けをしながら総合的に舞台を組み立てていますが、中には両方こなせる有能な人材も♪ 豪華な演奏陣と共に上演する舞台は、毎回好評を頂いております。

## ♣ 特徴Ⅲー優しい環境

近年は、結婚～出産～育児といった女性ならではの人生の変遷にも、劇団として対応出来る体制を整えようと模索中。これらの出来事は慶事ではあるものの、それまでの女性のライフスタイルを大きく変える一大事ではないでしょうか?

しかしながら「結婚しても、舞台に立ちたい!」「子育て中でも芝居に関わりたい!」といった熱意ある女性参加者には、劇団として極力広く門戸を開き、柔軟に対応できる姿勢を大事にしています。

## ◆ 次回公演予定 ◆

09.12.5(Sat.)-6(Sun.)  
10thSTAGE『西遊記～龍王編』  
@相鉄本多劇場

<http://www.icnet.ne.jp/~yabusaka/>  
[yabusaka@live.jp](mailto:yabusaka@live.jp)





## 劇団葡萄座

「遭 難、」 作/本谷有希子 演出/山本伸二

2009年7月4～5日 於:スペース・オルタ



この「遭難、」という作品は、話題の劇作家・本谷有希子さん作とのこと。実は、以前ふらっと立ち寄った本屋で、この作品を偶然読んだことがありました。少々運命的なものを感じつつ楽しみにしていましたが、実際舞台

にして観てみると、確かにおもしろい！話題になるだけのことはあると改めて感じました。

舞台は学校の職員室。性悪教師・里見が、生徒の自殺未遂が自分のせいであると思われなくするための、ありとあらゆる自己中心的行動を起こし、周囲の人間達を陥れていきます。その根底には、「自分かわいさ」があり、自分に都合が悪いことは、なにかと理由をつけて他人のせいにしてしまう、人間の弱い部分を

鋭く突いたシリアスコメディでした。

物語の構成としては、しっかりと筋の通ったものとなっていました。特に、他人に罪をなすりつけようとするための理論展開(屁理屈?)に、思わず感心してしまいました。また、登場する四人の教師と生徒の母親の個性も、上手く物語の流れと絡んでいました。

扱っているテーマは深く重い本作品ですが、お芝居を観ている限り、決して流れは重くなく、軽快に進んでいきました。深刻な場面では観客にも緊張感でビリビリとした雰囲気が流れていたし、そんな場面から一転して笑いをとる場面では緊張感が緩む感じが伝わってきて、非常にメリハリがありました。また、会話のテンポもよく、ストレスなくお芝居に集中できました。総合的に完成度の高い仕上がりになっていたと思います。

最後に、里見のような自己中心的「自分かわいさ」は、だれでも大なり小なり持っているものだと思います。しかし、それを前面に出して自己弁護する人はとても醜く見えるものだと、このお芝居を観ながら自戒を込めて痛感しました。日々の生活の中でも、気をつけていきたいものです。

【劇団川崎演劇塾 家守亜希子】

## 劇団蒼生樹

「在」 作/相馬杜宇 演出/秋梨 集

2009年7月10～12日 於:テアトルフォンテ



普通の市民社会のなかの「戦場」を抉る演技に感動！

「介護の場は戦場」との掲示が会場の入り口に上がる階段の下の掲示板に張られてありましたが、それがみように心にひっかかって入場しました。難聴のため一

番前の席に座って渡されたプログラムに目を通します。そこで「この作品はー」として脚本の相馬杜宇さんは、「介護」と「戦争」の二つの「戦場」をかいたものであることを明らかにされております。あの掲示の意味がすぐ理解できました。

この作品が「介護の戦場」を描いたものとして秀作であることはいまでもありません。その主役である被介護者が「戦争の戦場」というもうひとつの戦場をもつという設定によって、普通の市民社会のなかにひそむ普通ではない「戦場」のすさまじいまでの市民社会の現実を突きつけるすぐれた作品となっています。

脳梗塞で右半身不随の佐々山寛治役のため、セリフも動きも制限される難しい演技を見事にこなされていく中村俊夫さんの目線と表情にくぎづけになりました。そしてその演技とセットした、佐々山寛治の「2つの戦場」を明らかにしていく他の役者の方のメリハリの効いたセリフと演技は絶妙でした！私は市民社会の真髄を扱う地域演劇(リージョンシアター)のいろいろな取り組みにかかわってきていますが、このようなすぐれた作品と演技に出会ったことに感動を覚えました。そしてすでに亡くなった父がラジオから軍歌が流れるとスイッチを切る癖を思い出していました。父はゼロ戦づくりの技術者であったため戦争に行かないで済んだのですが、そのゼロ戦づくりのため勤労働員の高女や旧制中学生におこなった非道な仕打ちを思い出したためそうしたのでした。この普通の庶民がもつ異質な感性としての「戦場」を地域演劇(リージョンシアター)は大事にしたいと思う。

【劇団ひこばえ 村上芳信】

## 劇団河童座

「あおげ あおげ」 作/蒲谷 健 演出/横田和弘

「泣いた赤鬼」 原作/濱田廣介 脚色・演出/横田和弘

2009年8月1～2日 於:相鉄本多劇場



本多劇場ファミリーシアターで二本立てを見て来ました。客席の殆どが家族連れ、開演前の紙芝居は子どもたちが中心でとてもいい企画でした。

程なく一本目のとんち物語「あおげ、あおげ」が始まりました。

短編ながら小坊主たちのウイットに富んだ小気味良いテンポと絶妙のタイミングが私達を童心に帰らせてくれます。チラシには、沢山のキャストの名前がありました。世代の違う方々の競い合いが想像でき大変楽しみです。はじめ二本立ての上演に多少戸惑いがありましたが「泣いた赤鬼」が始まるとそれも払拭され独特のメルヘンの世界へと引き込まれます。ベテランの扮する赤鬼・青鬼の友情をベースに人間社会とのコミュニケーションの在り方について描いて行きます。とにかく鬼さんの扮装が綺麗で若作り、淋しげで一途な表情の赤鬼、物腰の柔らかい優しい表情の青鬼の持つ雰囲気にある種のファンタジーを感じました。

村人たちが老若男女が舞台を一杯に使ってリズムカルに演じていました。その中でも小さい子供たちが大人たちに合わせようと一生懸命で楽しそうだったのが印象的でした。

舞台造りや調和のとれたアンサンブルは、地域に密着した劇団でなければできないことを痛感しました。ベテランから次の世代へバトンタッチされた鬼がどんな鬼になるのかも大変興味のあるところで、ぜひ実現して欲しいものです。見ていた子どもたちは、大変楽しい時間を過ごしていました、暗転の時以外は。メルヘンの世界ただだけに美術・照明を駆使して改善していただけたらと思います。

あっという間の二本立てでしたが「見る側」も「演ずる側」も本当に家族的で劇団が若い力の育成に力を注がれていることにある意味、ジェラシーを感じました。「地域主権」の走りなのでしょうね。

【劇団かに座 川島一純】

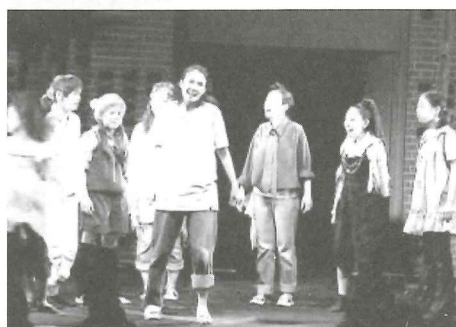


## 劇団ひこばえ

「おばけリンゴ」 原作/ヤーンシュ 作/谷川俊太郎 演出/山下智代(やまと塾)

2009年8月25日

於：横浜赤レンガ倉庫1号館3Fホール



この公演は劇団ひこばえと市民劇団演劇やまと塾の合同公演で、「開国博Y150」ベイサイド市民協催として横浜の赤レンガ倉庫で行われた。上演された「おばけリンゴ」は私共でも上演候補としているので大変興味深く観

させていただいた。劇団ひこばえの若い役者の皆さん（ほとんど女の子）は声も出ていて勢いもあり好感もてる舞台でしたが、会場が赤レンガ倉庫と云う事もあり声の反響が凄まじい為セリフがほとんど聞き取れなかったのが残念。

舞台上にはリンゴの木をイメージさせる斬新なオブジェのみで、

小道具等はすべて無対象。演出の意図ではありまじょうが……このような作品にはイメージを膨らませる為にも、もう少し夢のある小道具の助けが必要じゃなかったかと。また、最後までおばけリンゴが登場しなかったのがチョッピリ物足りなく感じた。セリフが伝わりにくかった点も加わって、観客にどれだけ作品を理解させることが出来たか……？ 進行の途中で現われたオブジェの影が印象的で微笑ましい舞台でした。

また、この公演では合同で「SEVEN BRIDES」という作品を上演。橋をテーマに群舞&群読とショートストーリーからなるオムニバス。「おばけリンゴ」とは一変、浮気やら何やら生々しい大人のジョークが続き……現実に戻された。若さと勢いのある群読は非常に素晴らしかったが、ショートストーリーとの関係が私にはよく理解できなかった。

合同公演での二作品、その作風のギャップに大いに戸惑いながら楽しませていただいた。

[劇団葡萄座 山本伸二]

## 演劇資料室だより

## 演劇資料室

神奈川県立青少年センター2階に「演劇資料室」を開設しております。

日本と外国の戯曲（約4000冊）をはじめ、演劇図書7500冊、演劇雑誌3500冊演劇団体の機関紙・誌多数を揃えております。神奈川県内・全国のアマチュア劇団の公演資料（パンフレット・チラシなど）劇団別に時系列で整理・ファイルしてあります。これらの図書・雑誌・資料は(社)横浜演劇研究所が半世紀以上の長期に亘り収集したものを中心に各方面からの寄贈、県費による購入などで構成され日本有数の所蔵規模です。

## ●ご利用案内●

- 1) 開室：毎週火曜～日曜（月曜休館）午前9時～午後5時  
\* 年末年始(12月28日～1月4日)休室
- 2) 図書・雑誌・上演台本・演劇公演資料は演劇資料室内では自由に閲覧いただけます。
- 3) 図書・上演台本・「貸出用」の表示のある雑誌については利用登録のうえ1回につき3冊、2週間貸出します。
- 4) 演劇資料（公演資料）・雑誌（保存用）の貸出しは行いません。
- 5) データベースで戯曲（脚本）の検索ができます。
- 6) 劇づくりに関するいろいろな問題の解決にスタッフがお手伝いさせていただきます。ご相談ください。

## 編集後記

本年度に入り3回目発行のドラマ神奈川です。

神奈川県演劇連盟の活発な活動で、主催・共催活動報告、進展状況、新・現劇団紹介などでドラマ神奈川の紙面のとりあいをしている状況です。そして、今回の掲載予定だった「Y150、赤レンガでポスター展開催」を断念いたしました。もうしわけありません。

しかし、ドラマ神奈川は県演連の劇団間交流、活動広報紙の役割をしておりますので、みさなさんのご提案をお待ちしております。

## 神奈川県演劇連盟加盟団体の記録 (50音順)

- 演劇プロデューサー「螺旋階段」 ●京浜協同劇団 ●劇団蒼生樹 ●劇団蒼い群 ●劇団河童座 ●劇団かに座 ●劇団川崎演劇塾 ●劇団きさく座
- 劇団こゆるぎ座 ●劇団ひこばえ ●劇団葡萄座 ●劇団麦の会 ●劇団やぶさか ●劇団横綱チュチュ ●風雲かぼちゃの馬車
- 横須賀市民劇団プロジェクト ●横浜小劇場 ●ラゾーナ川崎プラザソル ●ラ・テラ ●G/9-Project

神奈川県演劇連盟HP：<http://kenenren.web.infoseek.co.jp/2003/> 演劇資料室HP：<http://kenenren.web.infoseek.co.jp/shiryoushitsu/>